

与論城跡

与論城跡とは

①与論城跡の概要

与論城跡（与論グスク）は、鹿児島県最南端の島である与論島にあります。城跡は、島の南側に位置する城集落の西端の台地の端を利用して築かれています。伝承や江戸時代の古文書では、琉球国北山王の三男王舅や琉球王国の尚真王代の人物とされる花城真三郎によって築かれたといわれています。

②与論城跡の学術的評価

与論城跡は、沖永良部島の後蘭孫八城跡とともにグスクの北限として注目されています。さらに、総面積が3万㎡を超え、奄美群島だけでなく沖縄県の城跡を含めても最大級のグスクであることが分かっています。

③与論城跡で行われた過去の発掘調査

与論城跡では、平成5（1993）年に調査が行われています。発掘調査では、現在の十五夜踊り保存館周辺の調査区で、建物の柱跡や焼土の詰まった土抗（鍛冶をしていた跡か？）が発見されました。

また、現在の土俵前の調査区では、城跡の当時の床面と思われる層が確認されました。出土品は、11世紀から近現代まで幅広い年代のものがあありますが、14世紀～15世紀頃の陶磁器が多く出土しています。

ただし、同じ層の中から新しいものも古いものも一緒に出土しているため、築城年代等については今後の調査を踏まえた検討が必要です。



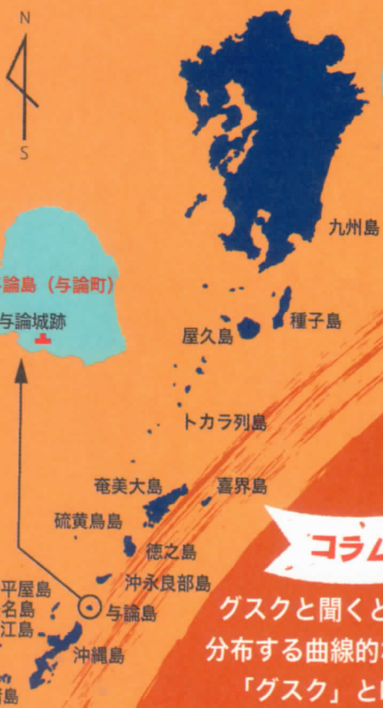
崖の平坦面を塞ぐ石垣1



曲輪II周辺の石垣



平成5年度の発掘調査風景（十五夜踊り保存館周辺）



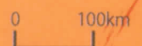
与論城跡はどこにあるの？

コラム① 与論城主の謎

与論城跡の築城主としては、王舅や花城真三郎という人物が伝わっていますが、彼らはどんな人物なのでしょう？
 まず王舅は、約600年前に今帰仁グスクを拠点に沖縄県北部から与論島、沖永良部島まで勢力を持った北山王の三男とされています。一方で花城真三郎は、約500年前に琉球国の最大版図（奄美群島から沖縄県全域）を築いた琉球国中山王の尚真王の時代の人物（次男とする説もあるようです）とされており、彼らが生きていた時代には100年近い差があります。
 いずれにしても、北山王や中山王といった沖縄島の勢力を背景に与論城跡が築城されたことが伺えるのではないのでしょうか。

コラム② グスクとは？

グスクと聞くと世界文化遺産に登録されている首里グスクや今帰仁グスク、中城グスクなど沖縄本島を中心に分布する曲線的な高い石垣で囲まれた城跡を想像する方が多いのではないのでしょうか？
 「グスク」と呼ばれる遺跡は、沖縄県内だけでも数百カ所存在しており、中には、石垣をほとんど持たないものや日本本土のお城のように山の斜面や尾根を堀等で寸断し、平坦面を土塁で囲むなど、多種多様なグスクがあります。しかし、地名に「グスク」が付く場所の中には聖地としての性格が強い場所や、逆に奄美大島だと城跡のような遺跡でも「グスク」とは現地で呼ばれない場所もあります。
 このため、一言でグスクとは何かを説明することは大変難しいですが、このパンフレットでは沖縄県や奄美群島に分布する城跡として扱っています。



与論城跡の現況測量図

YORON CASTLE



航空写真6枚：川上精一氏提供

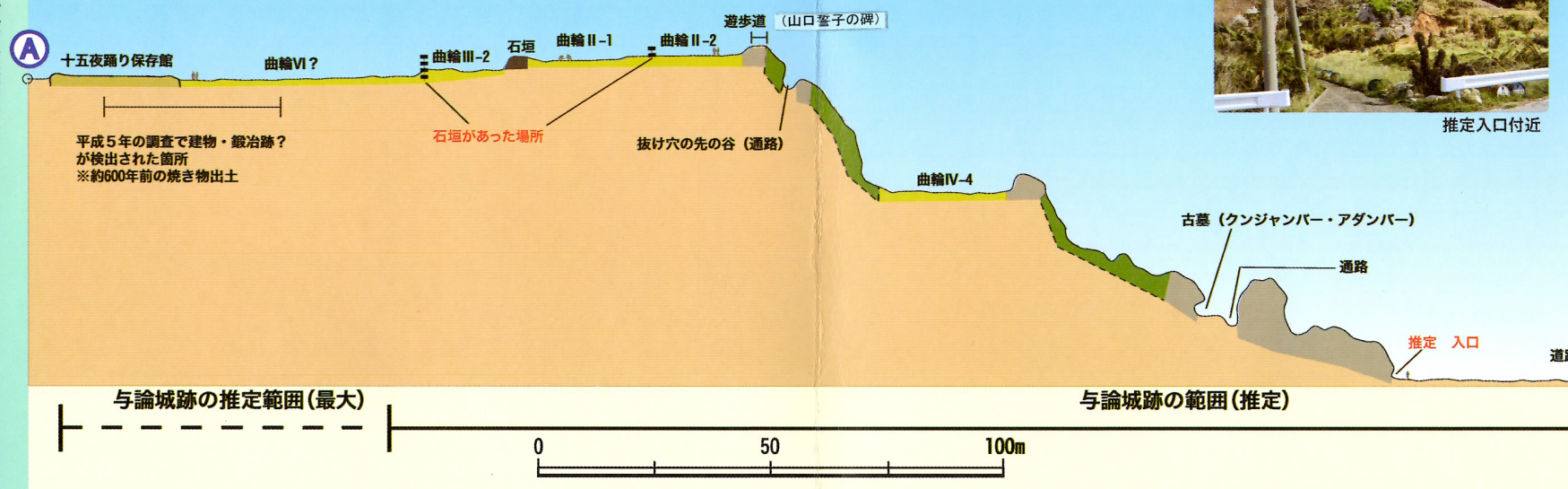


与論城跡の
ここが
ポイント!

Check!

①グスクの中でも最大規模
与論城跡は3万㎡をこえる面積 (4万㎡とも) を有します。実は、与論城跡と同規模のグスクは、首里グスクや今帰仁グスク、浦添グスクといった国王やその王子が居城とする王城クラスの大型グスクに限られています。これらのグスクは、当初から王城として造られることが多いことから、与論城跡もまた伝承にあるように、王子といった有力者の居城として造られたと考えられます。また、大型グスクは琉球国の拠点があった沖縄本島に限られているため、周辺の島々に築かれたグスク中では、与論城跡が最大規模を誇ります。

実は大きい!



与論城跡の
ここが
ポイント!

Check!

②巨岩と崖を利用した城造り
崖下の道路から与論城跡を望むと、急峻な崖と今にも落ちてきそうな巨岩が目にとまります。与論城跡の特徴は、断層崖を城域に取り込んだ城造りにありますが、与論城のように崖全体を城域に取り組んだグスクは、世界文化遺産の勝連グスク (うるま市) と上里・前城グスク (糸満市) を含めて3例程度しか類例がない珍しい縄張構造のようです。また、この特徴的な城の姿はハキビナ海岸や供利港からも見ることができます。つまり、島の南側の海を通る船からは、崖に石垣をめぐらしてそびえ立つ与論城跡の威容が目にとまったのではないのでしょうか。与論城跡は、海にも睨みを効かした城造りが考えられます。

珍しい造り!

※城内には私有地やお墓 (古墓) が多くあります。散策の際は節度を守った行動をお願いします。

2. 与論城跡の特徴

① 崖の利用

与論城跡の特徴はその大きさだけではありません。崖を利用した城造りにあります。与論島は石灰岩に覆われた低い島ですが、与論城跡のある場所は、断層によってできた高さ60m近い崖や巨岩が露出しています。この崖は、天然の城壁になるだけでなく、城の石垣の材料にもなります。この崖と巨岩の間を塞ぐように石垣をめぐらすことで、高い防御性を有しています。また、崖下には水が湧く場所もあるため、水源の確保も可能です。このように与論城跡は島の地形を十分に理解した上で、とても巧みに利用して築城されています。



崖を塞ぐように築かれた石垣②

② 城からの眺め

与論城跡の主郭に立つと考えられる琴平神社からは、周辺の島々や与論島の主な港や入り江（茶花港、供利港、ハキビナ海岸）を望むことが出来ます。船による交易が重要な役割を果たしていた時代には、この城の存在は、海上交通を抑えるうえで重要な役割を果たしていたと考えられます。



与論城跡からの眺め（伊平屋島方面）

3. 与論城跡の今後について

与論城跡は、奄美・沖縄の歴史を語る上で欠かせない重要な遺跡です。

しかし、時代の流れの中であつての姿が分からなくなりつつあります。

江戸時代には、サザンクロスセンター近くに、薩摩藩の在番所（当時の役場）が置かれました。幕末から明治・大正時代には、地主神社、琴平神社の境内整備が行われ、城内の一部は畑や墓地になりました。そして、崖部分は昭和の前半まで畑として使われていましたが、次第に木々に覆われてしまい石垣など本来の城の姿が見えなくなりました。

現在、与論城跡は国指定重要無形民俗文化財の与論の十五夜踊りが上演される場所であり、正月の初詣を始め、四季折々に多くの人々が訪れており、地域の人々に馴染みの深い城となっています。

今後の調査では、伐採作業や発掘調査を行って、この城の本来の姿を解き明かしていくとともに、城跡として愛される整備、活用を行っていききたいと思います。

